

国語科 教科主題

国語科における「探す」ための「学び」(2)

「国語科」的『探究』とは

学習指導要領改訂では、学校教育が育むべき資質・能力を、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱で整理している。そして、「主体的・対話的で深い学び」の実現が授業改善の視点とされ、学習過程の改善を通じて資質・能力が育まれるとしている。「学び」のうち「深い学び」は「各教科等で習得した知識や考え方を活用した、『見方・考え方』を働かせて、学習対象と深く関わり、問題を発見・解決したり、自己の考えを形成したり、思いを基に構想・創造したりする」過程と定義されている。

本校国語科ではこの「深い学び」を次のように定義した。

- ・テキストの表現を言語事項や背景を踏まえて解釈し、既存の知識、実生活での体験、読書等の追体験と結びつけて考えている。
- ・自己の考えを言葉で表現し、他者と交流することで多様な視点を心得て柔軟に考えようとしている。
- ・自己の学びを振り返り、新たな課題を見出し解決しようとする意欲を持つ。

これらを踏まえ、昨年度は「国語科における『探す』ための『学び』」をテーマに掲げ、「探す」ために教科で何を「学ぶ」のかを探っていった。「探す(探究)」の出発は「課題の設定」であり、換言すれば「問いを立てる」こととなる。1年間かけて、生徒から出た「問い」を学習の中心に据えて授業を構想していった。「問い」の質を考えていくこと、学習の評価などは課題として残ったが、学習者自らがもった「問い」を出発点とすることで読みを深めていく可能性を示すことができた。

今年度も「問い」を中心にすることは変わらないが、単元の終末に新たな「問い」を生み出すような授業構想をしていきたい。「探究」していくために自らの「問い」を出発点として学びが駆動していき、テキストをしっかりと読み込んでいく。そうしてはじめに立てた「問い」を深めていき、解決していくことで、また新たな「問い」が立ち上がってくる。それは、はじめに立てた「問い」では注目していなかったような要素を含んでいるだろう。導入時には目が向いていなかった要素をもつ「問い」をもつことが、「問い」の質が高まったことの現れであると考えた。そしてさらに、その質の高い「問い」について考えた経験によって、他のテキストを読んでいく際にもより深い読みをしていこうとする意欲・態度が涵養されると考えた。国語科における「探究」とは、このようにテキストと関わり、「問い」を持ち続け、学び続ける主体となることをめざすものである。

今年度の公開授業では中学校2年生の文学的文章を扱う。昨年度の実践も踏まえると、文学的文章は作品世界の中で「問い」をもったり考えたりすることができる。まず導入では、学習者は主要な登場人物に目を向けて「問い」を立て、読み始める。そこから、あまり登場しない人物や構成といった要素にも注目していくことで、単元の終結時には導入時には注目していなかった要素を含んだ「問い」が生まれるはずである。公開授業はこのようにして質の高い「問い」によって読みを深め、さらに次の学びに向かう意欲を高めることを期待した実践である。

こうした研究を通して、教科等や学校段階を越えた学びについて考えることも視野に入れ、広く共有される「学びの地図」を描けるようなカリキュラム開発を目指す。国語科において学び続ける主体をどのように育成していけばいいのか、どのような授業を構想すればいいのかを2年目の今年も「探究」していく。